

説教 『憎悪と不安から解き放たれる』 山本 護 牧師  
聖書 レビ記 19:15～16／マタイによる福音書 5:43～44

「あなたがたも聞いているとおり、〔目には目を、歯には歯を〕と命じられている(レビ 24:20,マタイ 5:38)。「あなたがたも聞いているとおり、〔隣人を愛し、敵を憎め〕と命じられている(レビ 19:18,マタイ 5:43)」。イエスが引用した律法は、際限のない復讐の連鎖に歯止めをかけるもので、人間の憎悪を理性的に抑制した。イエスはこの律法をより徹底させ、「無抵抗であれ(5:39)」、「敵を愛せよ(5:44)」と命じた。

日本国憲法第9条には「武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」とあり、「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と明示されている。ところが憲法を素通りして、いつのまにか最新の戦力を備えた自衛隊が「保持」されている。これに反対するキリスト者は次のように批判される。他国に攻められても「あなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい(5:39)」と言うつもりか、中国が海洋進出する時代に「下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい(5:40)」とはあまりに非現実的ではないか、と。

殺人事件が起きると報道機関は、「目には目を、歯には歯を(5:38)」という遺族感情を煽り立て、世の害悪たる「敵を憎む(5:43)」よう喧伝する。公のメディアで、憎悪を燃え上がらせる「気の毒な」遺族に、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(5:44)」と諭したら世は反発するだろう。なぜならば、多くの者が「隣人を愛し、敵を憎め(5:43)」という内向きの律法を支持しているからだ。

律法は、復讐の連鎖を抑制するが、憎悪と不安自体は解消されず、何かのきっかけで圧力を高めて、とんでもない破局を引き起こす。欧州ではユダヤ人虐殺が起こり、関東大震災時の日本では普通の住民が朝鮮人を虐殺した。内側の「隣人を愛する」だけでは結局自己保存に過ぎない。それが自己正統化される。だからイエスは「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(5:44)」と命じた。極端なのではない。人間のおぞましい罪から解き放たれるためなのだ。

「あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱い者を偏ってかばったり、力ある者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい(レビ 19:15)。「強い者におもねる」様はここかしこで見かけるが、「弱い者を偏ってかばってはならない」というところは興味深い。「弱い者をかばう」優しい心根よりも、客観的な「公平」が優先される律法。しかしこれは、あくまでも「隣人(19:13,18)」、「同胞(19:15,17)」という内側の倫理のこと。それに対してイエスは、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(5:44)」と命じた。すなわちイエスにとっては、内側も外側もないのだ。

愛することには味方も敵もない。それは結構なことだが、抑えることは出来ても消えることのない人間の憎悪や不安はどこで解決されるのか。イエスは教えると共に、世の憎悪と不安を十字架において一身に負われ、私たちを解き放って下さった。つまり「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださった(ガラテヤ 3:13)」。それは愛と祝福が、外側にいる私たち「異邦人に及ぶためであり、約束された“霊”を信仰によって受けるためであった(3:14)」。



#### 【おまけのひとこと】

抑え込んでも憎悪と不安は消えない 世の陰に滓のごとく溜まっていく それが溢れる時 憎悪は不安で拡大し 不安は憎悪で倍加され 暗い底部を削り取る だがそこに十字架が建てられている